

合主催、昭和十五年度東亞視察團
第一班が、三月二十八日郵船の淺
間丸で、横濱に入港するといふ圓
長よりの通知が、大原博士の許へ
三月二十六日午後浦島を立ち、一
切の打合せや準備を了して、
二入港延期
が其記録の大部分である。
右大會の要項を聞くに、今秋舉げ
らるる、曠古の祝典に際し、世界各
地の同胞の代表者を皇都に招きて
共に奉祝し、母國を在外同胞諸國
體との統一の連絡を一層緊密にし

内郷村報の 六大使命

- 一、政黨政權を離れて、村政を自主主義を標榜す。
- 二、村内外各機關の活動状況を報導し併せて其協調を計り、進取和進努力の實現を期す。
- 三、本村社會事業の徹底を期す。
- 四、村内の善事善行を記録し、且之を發揚す。
- 五、本村に本村の善者及本村の善行を記録し、且其發揚に努力す。
- 六、尙餘力を以て、國民善導に當る。

内郷村報

天法人則
ルベシ
順ナ

矢部善兵衛君の 「母の思ひ出」を讀みて

大内 民 惠

一 緒 言

矢部善兵衛君は、本縣喜多方町の産、商科大學の出身にして、報徳社中堅の士、眞摯なる青年學徒たる一面、報徳社の熱烈なる宣傳家であり、且つ其實行家である。其「母の思ひ出」は、物故せられた母堂の追憶記録であつて、四六版一七二頁、家紋を配して装禎し見るからに高雅な冊子であつて、之を其知己親戚のみに頒たれた非賣品である。

予は其經子夫人の母堂、蔽内仲子夫人の從兄たる關係上、三月十五日其一本を寄贈せらる、光榮に浴し、同日晚餐後十時より之を開卷、感激嗚咽、夜を徹して讀了、之れ報徳社の教科書であると共に萬人必讀の書なる哉、の感に打たれたのであつた。されど非賣品なるが故に、せめては其大要を文で本紙上に紹介して、同君の篤行を讃嘆すると共に、世道人心の教化に資せんものも考へたのであるが、如何せん紙面狭小其意を果し得ないので、報徳社副社長佐々井信太郎先生の序文、同君の自序文及其目次を、其儘こゝに掲載するからである。

二 佐々井先生の序文

矢部君の孝心は實に至純熾し難きものなることを知つて居るので何時になつても褪色することはないと思ふけれども、特にその印象の新たなる間に之を記録して置かれるよからうとお勧めした。それは私が早くから、祖先や兩親の事を認めて置かうと考へてから既に數十年、魯鈍の性故早兩親への憧憬も聊か霧に隔てられた心地がするからである。

「母の思ひ出」を内示されてから數旬、漸く昨夜八時半から拜見し始めた所、全くこれ血涙の文字、何回か眼鏡を拭いて休止する能はず、十二時半に至つて嗚咽の裡に卷を終つた。癡に就いては印象の濃きもの多時。私は矢部君が御兩親を失はれた不幸を憫愍するの切なると同時に、また多幸なることを知つた、それは道を得た後に喪に服されたからである。御

一本先生の題詠

矢部のうしより身不知悔を惠
まされし家内の文に亡き母君の
事とも記されけるを讀みて
たらちめの いませし去年を
のふ子の あかきこゝろを この
實にも見る 喜 徳

三 矢部君の自序文

昭和十四年一月十四日、予に於ては觀音様の様に暮らしたい母を喪つた。人力の限を盡さうと力めたが、天命如何ともな得なかつた。重懲に陥つて後往生を遂ぐるまでの母の態度は、我母ながらよくまあ、あれまでに感嘆する程の見事な境涯に達したものであつた。感謝と愛敬の念は益々燃え上つた。と共に予の少年時代より母の追憶の念、感謝追慕の念

母上は君が信念を確立せられたことを眼前に見て、一切の疑念を拭いて神去られたことである。而してまた母子一團一元の生活を無感して、永遠に共に生き長らへられるからである。特に經子夫人の微笑された聲響はこの上なき感激悲愴であつたこと、思ふ。純眞至情の孝子の享くる幸福は容易に授かることの出來難きものである。

この「母の思ひ出」を讀みながら思ひ出したのは、訃報を受けて早速矢部家を訪問した時、白皚々の大雪に一切の浄化された朝のこゝろであつた。矢部君の涙を何程か輕からしめようと思つた私が、却つて忘れ難い、涙を味つたことであつた。而して今當時の有様を思ひ浮べて切なる情を新にした

が強く、涌き上つて來た。然し此感激も或は年と共に予の心より薄らぐ事を虞れた。之を予の記憶に新になし得る爲、又道友知己に味はつて頂きたい爲、且又子孫に永く傳へて家訓とも致し度い爲に、記録に於て置き度いといふ氣持が強く起して來た。翌々月一月十六日母の骸を茶毗に附する日の朝、恩師佐々井信太郎先生は寸暇なき御多忙の御日程を繰合してわざわざ會津の地にまで用問して下された。予は驚喜して迎へ、母の大往生前後の様子を傳へ、予の感激をそのまゝに此の師にこそ吐露した。先生も深く感じ下さつた。そして一年以内位に「母の思ひ出」の稿を書上げる事を勧められた。決心は成つた。

而るに其後母の祭祀や歿後の整理等に忙殺された上に、畏くも清宮貴子内親王殿下御降誕に付、要經子は思ひもかけず乳人奉仕の大任を拜し、御降誕に先だち二月六日參入、三月二日 御降誕遊ばされ、此前後國民としての最大の恐懼、感激、歡喜に浸り、責任感に緊張する等にて、思ひながらも筆を執る餘裕はなかつた。

四月一日予の三十二回の誕生を迎へた日、始めて筆を下す机に面した。想を練り、母を追憶して來るべき必然的に結び附いて思ひ出るのは父のせもかげである。「母の思ひ出」の他に「父の思ひ出」を書くと云ふ事も出来ない。此の稿の中に表裏織成して父の思ひ出をも融合せしむる事に決した。始めは簡単に書上げ得ると思つた。而るに親子一團一元、父に成りきり、母に成りきつた氣持で筆を執る内に、今まで氣付かなかつた事、記憶に薄れたと思つて居た事までハッキリ思ひ浮び、あれも書かう、之も書かうと思つて進

んで居た所、二百字詰の原稿三百枚に達した。

初めの間は禿筆殊に甚だしく遅々として難産を極めた。遠い以前の事であり、其の上に一念一心に成りきるのに時間を要する處、次から次と來客あり、用事生じて折角の心境が破れてしまふ。妻經子が乳人奉仕中に留守を堅め極力出張等は少くする予定であつたが、時局益々重大化すると共に、報徳の道を渴望する事早天に慈雨を望むが如き状態にあるので、予の如き未熟者すら微力を捧ぐ可く動員せらるゝ、事甚だ多く、従つて出張やむなく頻繁なる上に、家事及地方民としての務めも多端である爲、落ち附いて執筆し得る日時が極めて少い。四月一日に着手し十月九日一應の完結を見得るまで少々々々筆を執り得たる日数は三十七日である。非能率なる洵に汗顔の至である。然し原稿の後半頃よりは記憶も生々しい爲、流石の禿筆も些か速力を生じて來た。母の重懲以後を記するに至つては、情景まざまざと浮び、當時の心境に浸りつゝ、涙と共に筆を進めた。結末に近づくに従つて涙は多くなり十月八日は午前二時まで、十月九日は夜十二時近くに至り嗚咽のうちに完結し、直ちに母の寫眞の前に捧げた。

追憶となるその在りし時代の美点長所ののみが思ひ出される。先きにも述べた如く自分に於ては觀世音菩薩の様にすら慕はしい。たしかに偉大なる母であつたと思ふし、殊に大往生の少し前からは一切を悟つた如く見事な境涯であつた事に思はれる。然し乍ら母は元來多くの缺點も強くもつて居た。決して何れ彼も申分のない婦人であつたとは思はない。た

二面へ續く！

二面へ續く！

萬有歸天法
同

本報定價一月五元、半年十元、一年二十元、郵費在內。
發行所 内郷村報社
印刷所 大内民惠

一面より續く... 缺點もあつた母が恰も春夏秋冬の輪廻の如く...

母堂一生の信條... 生きては徳を積まんと努め、死しては子孫の幸福を祈る。

此の御歌を「母の思ひ出」の題... 此の御歌を「母の思ひ出」の題として掲げ度き旨ふた所...

居る事さ信する。又文字及仮名遣等に付ては...

磐炭 礦業所長の更迭

菅原萬治郎氏は、大正七年磐炭に入社以來二十有三年、町田坑長より一躍礦業所長に昇任...



菅原萬治郎氏

半島人移入... 磐炭に於ける半島人移入は左記の通り行はれた。

全山に種痘... 磐炭に於ては、天然痘流行の兆に鑑み、三月二十七日より四月二日迄六日間にわたり、全山の従業員に對して臨時種痘を實施した。

四其目次... 一 母と父及祖母。二 子の教育。三 母と一家雜居の切抜。四 母の安堵。五 母と信念。六 母の樂しみ。七 母の平素の健康と發病の前後。八 母の重慶。九 病中に於ける母の歡喜感激の悟り。十 母の大往生。十一 告別式。十二 むすび。以上

米増産と 督勵委員

石城郡農會にては、米増産確保の總動員を行ひ、其計畫は十八萬六千九百九石の基準に對し、五千八百八十九石を増産する豫算を立て...

三村議の辭任... 井上惠助、茅根正夫、柳瀨菊次郎の三氏は、最近磐炭を退社したるを以て、村會議員を辭任した。

教育制度改革概論

矢野恒太郎 大内民恵著 (四六版二二頁 定價五十錢 税六郵税)

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同枚舉に違あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

村會記

三月二十五日開議 市村合併並に境界變更

歳入 金三六八三圓、追加豫算額

淺野社長來山

磐炭同社長には、三月二十七日來山、翌二十八日全山を視察して歸京した。

日本評論社

發行所 東京大塚三丁目 東京所 内郷村報社

矢野 恒太序 大内民惠著
教育制度改革概論
 (四六版二一頁 定價五十錢 稅六郵額)

「出」の中に「隨處に先生が現はれて居られる。一木先生及び佐々井先生より題詠及び序文を頂き得て、母の靈も定めぬ感謝感激して

以上何れも産業報國の念に燃え、元氣潑刺として來山それら各寄宿舎に收容せられた。

我が教育學界の權威
 前京大總長小西重直博士
 書を寄せて曰く、多年、御體験と實地ノ御試練ニ基ク眞實國ノ大精神ヲ拜味仕リ不願感戴ニシテ申儀云々。

野田君の有益なる講演があつた。聴衆は現場職員及親和會世話役等約百八十名。

發行所 日本評論社
 東京 橋本三丁目
 取次所 内郷村報社

村會記

三月二十五日開議

市村合併並に境界變更に關する件 縣總務部長宛報告

首題の件當村會に於て絶對反對に全員一致せり

理由

一、當村は人口三万五千以上に達し目下計畫中なる温泉掘鑿完成を俟つて町制を布く希望を有す。
 二、町制を施行するにせば小島、御台境、御厩の三大字は町の發展上必須の地域に屬す。

議案第一號

本村區長及代理者は三月三十一日任期滿了に付後任者として左記の者を適任者と認め推薦決定す。

順序は區順 ○点は再選

- 大越貞治郎 鈴木留次郎
- 高萩忠太郎 鈴木平太
- 久野藤二郎 仲繪 藤一
- 金澤 慶一 沼田 敬助
- 山崎米太郎 齋藤 直重
- 遠藤萬四郎 遠藤千代次
- 網掛 豊作 野木 春伊
- 萩 定雄 草野 利雄
- 山下喜代治 吉田伊三郎

議案第二號
 昭和十四年度歳入歳出追加豫算

歳入

金三六八三圓、追加豫算額
 金一九二四二三圓

合計一九六一〇六圓

歳出

金一六六七五六圓

經常部已定豫算額
 金七二六圓 同追加豫算額
 金二五六六七圓

臨時部已定豫算額
 金二九五七圓同追加豫算額
 合計金一九六一〇六圓

議案第三號

村財務規定別冊の通り設定するものとす。

本村財務規定別冊の通り設定するものとす。

議案第四號

温泉掘鑿事業施行の件

紀元二千六百年奉祝記念事業として温泉掘鑿事業を施行するものとす。其豫算金四萬八千二百圓。(可決)

兩氏の篤志

金貳拾圓、内町馬目トメ子氏は還曆記念として陸軍恤兵部へ献金。

金拾圓、宮坂本善二氏は出征中のごとく歸還したるを以て、留守家族援護をうけたるを感謝して、同じく恤兵部へ献金。

淺野社長來山

警族同社長には、三月十七日來山、翌二十八日全山を視察して歸京した。

役場吏員更迭

囑託田中淳三、書記野木安吉の兩氏は、三月三十一日附を以て依願退職し、其後任として、鈴木好定(前第二小學校訓導)高橋勇(前本縣巡查)野木彌三郎(前本村警防分團長)の三氏が就任した。

模範青年 神田義英君

往年七年會の模範會員であつた神田義英君は、刻苦奮勉其採用試験は及第して朝鮮總督府の巡查を拜命、更に精勵邁進、部長となり警部補に昇任したのであつたが、此程老親扶養の爲退職歸村、警務課に其採用方を願した。

内郷村學事概報

尋常高等學校(高坂) 尋常科
 在籍、一五四六。修業生、一二九三。卒業生、二五三。優等賞、三二二。精勵賞、八〇六。六ヶ年精勵賞、三八。部會賞、四。根本一夫、小松原定雄、今泉ハツイ、小松ヒサ。

新入學生、二二三。高等科
 在籍、一一五七。修業生、六三四。卒業生、五二二。優等賞、二六三。精勵賞、五五七。八ヶ年精勵賞、八六。部會賞、猪野秋吉、佐藤剛平、山田武清、武者正春、寒河江庄治、黒坂チエ、箭田光子、大内フヨ子、工藤アキ。

新入學生、六七三。中等學校入學者

中學校。平山昭三、菅野勝雄、根本一夫、大和田喜美、鈴木正、小松原定雄、由本幸男、五十嵐健夫、根本唯一、薄葉成久、加藤壽夫、大宮英哉。

商業學校。丹野勉、山本仁、鈴木光明、鈴木七男、玉木政夫、尾深義房、喜嶋一夫、鈴木廣、齋藤安美、金成昭次。

高等女學校。小松ヒサ、池田ヒサ松浦ミヨ、伊藤多恵子、佐藤利子、春川タケ、田中キヨ子。

實科高等女學校。田崎一子。教員異動。轉出、鹿島校長へ、小野清春。大野校長へ、大和田勇入。遠野校長へ、佐藤清義。江名校へ、岡田勝雄。湯本校へ、藤本正。大浦校へ、大和田イサ。内郷第三校へ、友保いづ子。

轉入、箕輪第一より、吾妻新吉。入遠野より、矢代常好。磐崎第一より、佐藤博。石川郡雨田より、猪爪福彌。平より、鈴木百世。好間より、小島キク。新山より、横須賀ツネ。新卒業。山崎綾子。

内郷村青年學校(高坂) 在籍、八〇。卒業生、二。修業生七八。精勵生、仲繪誠、大瀧應喜、鈴木立雄、草野英一、住谷公作、青木久夫、松澤幸一、宮澤崇夫、小山田正雄、宇佐美正親、山崎正士、下山田百世、國井良晏、小山勇、大倉勝美、寒河江秀雄、寺島榮吉、猪崎清、志賀眞男、小松勇太郎、小松秀平、渡邊秀雄、藤田太吉、五ヶ年精勵、渡邊秀雄、藤田太吉。教育部會賞、渡邊秀雄。教員數、一六名。

第一校(御厩) 在籍、四四一。修業生、三五八。卒業生、四七。優等賞、九五。進歩賞、一。精勵賞、一九八。六ヶ年精勵賞、七。部會賞、佐藤暎。中等學校入學者

中學校。佐藤暎、野木英雄。商業學校。野木清司、松野榮、源重。

女學校。佐川和子、吉田悦子。受持訓導、廣木春正。教員異動。轉出、好間校へ、吉成幸子。退職、掛田三郎。轉入、好間校より、大内カツ。

第二校(内町) 在籍、二〇四三。修業生、一七四七。卒業生、二九六。優等賞、三〇一。進歩賞、三二。精勵賞、八二一。六ヶ年精勵賞、四四。部會賞、四。鈴木一彦、高木茂昌、草野文字、關谷和代。

中等學校入學者
 中學校。鈴木一彦、鈴木國義、新妻敏男、高木茂昌、和田恒彦、服

一四面へ續く

内郷村報

天法順人則

六大使命

- 一、政治改革を期して、村政を刷新す。
二、村内公私各機關の活動状況を調査し、併せて其協力を計り、進取和進努力の實現を期す。
三、本村社會事業の徹底を期す。

内郷村報の

伊達郡掛田町出身東海林甚七氏を團長とし、同岡崎源吉氏を副團長とする、ホノル、日本人旅館組合主催、昭和十五年度東亞視察團第一班が、三月二十八日郵船の渡問丸で、横濱に入港するさい、團長よりの通知が、大原博士の許へ

京濱四日間

大内民恵

はいつたので、取り敢へず關係者間で協議を行ひ、結局縣海外協會代表として、予が京濱迄の歓迎使節を仰せつかつたのである。これが其記録の大要である。
二 入港延期
一切の打合せを準備を了して、三月二十六日午後福島の立ち、一

一 三面より續く
部芳雄、市川祐徳。
商業學校、小松反三、若松元弘、渡邊忠弘、齊藤忠、山崎昭平。
高等女學校、草野文子、小川幸子、金子智、關谷和代、笹島壽子、阿部和子、秋腰昌子、新妻君子。
受持訓導、大越卓、山崎廣元、星春治、渡邊政代。
新入學生、三五四名。
教員異動、轉出、川部校へ、戸村茂。退職、鈴木好定、猪狩登三男、鈴木滋、湯澤幸雄。轉入、田村菅谷校より、小澤良太郎。安達白岩校より、瀧葉秀司。石川川邊校より、田子末壽。信夫渡利校より、大谷淑子。新任、佐々木繁子、中野幾。

賞、四。福島正、都築繁彦、山崎三重子、船山昭子。六ヶ年精勤児童保護者表彰、五八。新入學生、二九。
中等學校入學者
中學校、都築繁彦、猪狩光男、小坂橋龜治、比佐秀雄、佐藤明一、賀良隆、武藤義孝。
商業學校、葉谷茂三郎。
高等女學校、山崎三重子、泉富美子、桑島昭子、鈴木ツチ子、船山昭子、兒島幸子、井上翠、永山チヨ子、鈴木ヒサ。
受持訓導、中田正己、安部憲二、三本管正、庄司主税。
教員異動、轉出、合戸校長へ、高木豊太郎。田村郡瀧根校へ、佐藤淳一。箕輪第一校へ、中田正己。退職、竹島國基、三本管正。東京へ。轉入、湯本入山校より、井上佳都美。勿來學校より、鈴木勲。内郷高等校より、反保いつ子。師範卒業、堀本ユイノ。二名缺員。
◇内郷家政女學校(綴)
在籍、九四。本科卒業生、四一。研究科修了生、七。優等賞、本科卒業生、八。研究科修了生、一。部會賞、荒木貞子。精勤賞、三〇。教員異動ナシ。

先づ内郷に歸宅一泊。翌二十七日午前九時發、路濱濱に向ふ。相變らざる満員だが、倅ひに窓際に空席を得て落ちつく。武蔵野の早春！一刷毛なすつた様な満電！グエールをおほほる筑波や富士を送迎しつ、櫻木町驛より下車して指定旅館上州屋に着いたのは、午後四時であつた。聞けば時化の爲に、三十日午前に延期との事、それで其間東京の用を達さうと考へ、團長宛に「上州屋にて待つ大内」と打電して東京に引返す。定宿上野禁酒ホテルに投宿。
三 在外同胞代表者大會と日米新聞社
三月二十八日午前五時起床。各

謹啓 春寒料峭の候益々御清奉賀候。内郷村報に依り此度海外協會の爲御盡力被遊候趣拜承又御令息一郎殿北海道より歸郷御協力の由邦家の爲大慶至極に奉存候。益々御雄健の程奉祈候。
敬具
三月二十七日 外山福男
一 外山氏は京都府經濟部長
新聞社へ渡問丸入港延期を知らせ協會將來の事業に就いて、其聲援を乞ふ爲に、在京本縣各代議士諸氏を歴訪しやうと、電話をかけて見たが、何れも議會明けで旅行不在なので、警察本社を訪問して敬意を表し、午後三時町門ビル内在外同胞代表者大會本部を訪問したるに、生憎主任は不在、日大貿易研究會幹事木村君を通じて、右大會の要項を聞くに、今秋舉ぐる大内氏の祝典に際し、世界各地の同胞の代表者を皇都に招きて共に奉祝し、母國と在外同胞諸團體との統一の連絡を一層緊密にし

將來在外先覺同胞の事業を繼承すべき第二世の堅實なる發展をも期するさいふのが其目的であり事業であつて、其總裁には近衛公を推戴する事に決定した事の事であつた。其より淡路町のニッポンアメリカ社を訪問したが、之亦社長不在社員田村氏について、各方面の消息を聴く。三十年前の知己在ホノルの村田龍一君が、ホノル支社を采する由を聞いて感懐之を久しうす。次いで九段を参拜遊草に参詣、一寸オハラ館をのぞいて、時代の風潮に觸れ、午後八時ホテルに歸る。
四 松坂屋 三越 日米社 八聖殿
三月二十九日例によつて五時起床。日米社の警備精一氏に會見しやうと電話をかけたが、正午頃でなければ出社しないといふので、八時宿を出て、松坂屋の乃木東郷兩將軍墨展覧會を觀覽、今更ながら其筆端に透しる忠烈に感激し三越の「春の青龍社」第八回展を一瞥しては、同社同人の畫風を若干會得したやうな氣がした。午後日米社を訪問、警備社長を初め、何れも多年海外に在在した事のある、小野寺、鈴木、五月女の諸氏等と會見、約二時間余各種問題について懇談、種々得る處があつた。三時半東京驛より横濱に至り、安達謙蔵氏の建立にかゝる、有名な本牧の八聖殿に参詣する。海岸に近き、亭々たる松木立に圍まれ立てる八角の殿堂、階上講堂の正面には、直徑尺五の神鏡、向つて右には聖徳太子、空海、親鸞日蓮。左には釋迦、孔子、基督、メクラテスの等身像を安置し、此講堂では折々八聖に因る講演會が開かるゝこの事、安達氏の政治的生命よりも、此八聖禮讚の聖業

こそは、永遠に其光輝を放つもの、心から尊く思はれた。かくて薄暮上州屋に至れば、東海林團長より感謝の電報が着いて居り、鈴木七郎君が来て居られたので、同宿して一行歓迎の準備をなす。
五一 一行の歓迎
三月三十日五時起床、鈴木君は特製の歓迎旗をもつて、七時新聞記者一行と共に、ランチで港外碇泊の渡問丸に向ひ、予は十時波止場に至る。十一時半船は徐々入港し来る。予は棧橋階上の欄干に懸て用意して行つた「福島縣海外協會」に横に大書した布帛を兩手に擁して、一行を迎ふる目標とした之を見附けた一行は、鈴木君を中心に、歓迎旗を打振つて之に應じた。午後一時、或は二十幾年ぶりか、或は生れて初めてか、あつたの母國の土を踏む、若者男女五十五名一行の上陸するを迎へた。一同記念撮影を行ひ、日本郵船の招待に應じて、平安樓の書畫會に臨む。帆船代表石黒氏及縣代表予の歓迎の辭、團長代理丹野氏の謝辭あつて、十分に御馳走をいたさき上州屋と組國區に分宿。一兩日滞在、關西方面の觀光に向ひ、四月二十日頃來縣の予定なれば、其頃を期して、福島市に於て再び歓迎する事を約して、夜行で福島へ歸着したのは、三十一日午前二時であつた。
松ヶ岡公園遠望
松が岡 松になびける 白雲は
いま真盛りの 櫻なりけり
萬有 歸 天法
同

母上は君が信念を確立せられたことを眼に見て、一切の疑念を拭いて神去られた。こゝである。而してまた母子一圓一元の生活を感懐して、永遠に共に生き長らへられ

が強く 涌き上つて来た。然し此感激も或は年と共に予の心より薄らぐ事を慮れた。之を予の記憶に新に記し得る爲、又道友知己に味よつて預きた。爲、且又子孫

入て居た所、二百字詰の原稿三百枚に達した。
初めの間は筆筆殊に甚だしく遅々として難産を極めた。遠い以前の事であり、其の上二一、二一、二一

本紙定価一冊五錢五分(年報費金四十八錢)
發行所 内郷村報社
印刷所 平活版所